

三加和町文化財調査報告第2集

田中城跡

II

—主郭調査の概要—

1988

三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告第2集

田中城跡

II

—主郭調査の概要—

1988

三加和町教育委員会

序

遺跡は私達の遠い祖先が残した貴重な歴史的遺産であり、将来に向けて積極的に保存・継承して行かねばなりません。

三加和町教育委員会では、こうした立場にたって遺跡保存を前提とする重要遺跡緊急調査を行って参りました。今回の調査は継続事業2ケ年目に当り、特に本年度は掘立柱建物等が広範囲に確認され、本丸跡を知る貴重な資料を得ることが出来ました。また、遺跡からは碗や皿等の日常雑器・輸入磁器等、数多くの貴重な遺物が発見されており、郷土の歴史や学術的研究を深める上で大変重要な調査となりました。

この調査及び本報告書作成に当りましては、県文化課の御指導を受けながら、直接調査を担当されました黒田裕司調査員にまとめて頂きました。ここに心からお礼を申し上げますと共に、調査に協力して頂きました関係各位の御支援に深く感謝申し上げます。

尚、今後も歴史的遺産を後世に伝える事業として調査の継続と史跡整備に努め、歴史の流れを自ら体で学べる場となれば望外のしあわせです。

昭和63年3月31日

三加和町教育長 上 原 松 柏

例 言

1. 本書は、熊本県五名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、昭和62年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物の実測は、浦田信智（熊本県文化課）が、遺物・遺構の製図には黒田があたった。また、拓本は小山正子が行った。
4. 調査時の写真撮影は、黒田が行い、整理時の写真撮影及び焼き付けは浦田が行った。
5. 本書の執筆には、主として黒田があたり、第Ⅰ章第1節を藤本住人（三加和町社会教育課係長）が担当した。
6. 遺物・遺構に関しては、大田幸博氏（熊本県文化課文化財保護主事）の御教示を得た。
7. 本書で使用する遺構の略記号は次の通りである。
SB－掘立柱建物、SD－溝遺構、SK－土壇、
SI－竪穴住居跡、SX－不明遺構
8. 本書の編集は、黒田が担当した。

（題字は山下保幸保育園長による。）

本文目次

第I章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第II章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 歴史的環境	3
第III章 遺 構	9
第1節 掘立柱建物跡	9
第2節 土 塙	9
第3節 溝遺構	13
第4節 竪穴住居跡	13
第IV章 出土遺物	14
1. 土師器	14
2. 瓦質土器	14
3. 攪鉢	14
4. 須恵質土器	14
5. 青磁	17
6. 染付	17
7. 備前焼	17
8. 火舎	17
9. 石製品	17
10. 金属製品	17
11. 土錘	17
12. 弥生土器	18
第V章 まとめ	20

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	4
第2図 遺構配置図	5
第3図 1号掘立柱建物跡実測図	7

第4図	3号掘立柱建物跡実測図	10
第5図	8号掘立柱建物跡実測図	11
第6図	3号土壇実測図	12
第7図	2号溝遺構実測図	13
第8図	土師器・瓦質土器・播鉢・須恵質土器実測図	15
第9図	青磁・染付・備前焼・火舎実測図	16
第10図	石製品・金属製品・弥生土器実測図	18
第11図	土鍾実測図	19

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	掘立柱建物跡一覧表	11
第3表	土鍾計測表	19

写真図版目次

図版 1	(1)遠景 (北東より)	(2)遠景 (南西より)
	(3)空堀	
図版 2	(1)主郭全景 (北より)	(2)SB-01 (西より)
	(3)SB-02 (西より)	(4)SB-03 (西より)
	(5)SB-05 (北より)	(6)SB-04・05 (南より)
	(7)SB-12・13 (北西より)	(8)SB-06~11 (北西より)
図版 3	(1)SK-03	(2)SK-01
	(3)柱穴検出状態	(4)柱痕跡検出状態
	(5)根固め石検出状態	(6)火舎出土状態
	(7)播鉢出土状態	(8)土鍾出土状態
	(9)土鍾出土状態	
図版 4	遺物出土状態	
図版 5	出土遺物 (土師器・瓦質土器・播鉢・須恵質土器)	
図版 6	出土遺物 (青磁・染付・火舎・石臼)	
図版 7	出土遺物 (金属製品・土鍾・弥生土器)	

第 I 章 序 説

第 1 節 調査に至る経過

三加和町和仁字古城に存する田中城跡は、戦国時代末期の“和仁”一族の居城であり、中世から近世への過渡期の城跡としては県下最大級の規模で、ほぼ原形をとどめており、県下の数多い中世城の中でも極めてその価値が高く、昭和61年4月15日付で県史跡として指定された。

町としては、この中世城跡を貴重な文化遺産・観光資源として活用、城跡一帯を史跡公園として整備するための基本構想を策定しているところである。

昭和59年に試掘調査を実施し、田中城跡関係のものとして間違いない柱穴が多数検出され、これを受け、昭和61年度に国庫補助を受けて本格的に主郭跡の一部の発掘調査を実施し、更に昭和62年度、その残りの部分の調査に昭和62年8月21日から県文化課の指導を仰ぎながら取りかかった。

第 2 節 調査経過

9月21日 本年度の発掘予定範囲を昨年と同様の約400㎡と決め、昨年度調査区のグリッドに従い、杭打ちを行う。

9月22日～10月12日 表土剥ぎ、遺構検出。晴天が続き、散水しながらの調査となる。土師皿・播鉢・青磁など出土。5棟の掘立柱建物跡を検出（一部は昨年度調査区に延びる）。

10月12日～14日 遺構・遺物写真撮影。

10月13日～22日 遺構発掘。

土壌や不明遺構の埋土中より土師皿・火舎・鉄釘など出土。SK-02、SX-02の発掘により、SD-03の厨部分を検出。それによりSD-03は、幅約2m、深さ約1.5mの溝と判明。

10月22日～28日 完掘写真撮影のための全体清掃。

10月28日 写真撮影。

遣り方を組んで遺構実測を開始（1/20）。

当初予定していた範囲の発掘が終わったので調査区を広げる。（但し、田中城最終段階と考えられる遺構の発掘のみ）

10月28日～11月5日 表土剥ぎ。

11月5日～12日 遺構検出。検出柱穴数は極めて少ない。

11月11日 遺物集中域の実測（1/10）。

11月14日～12月1日 遺構発掘。

SK-02より多量の炭化物・焼土検出。カマド跡と思われる。

- 11月18日 当初予定した範囲の調査を終了。
- 11月21日 国衆一揆400周年記念シンポジウム関係者視察
- 11月28日 服部英雄文化庁調査官視察。
- 11月30日 弥生時代後期の住居跡1基を確認。
- 12月1日～3日 写真撮影のための清掃。
- 12月3日 写真撮影。
- 12月4日～21日 遣り方を組んでの遺構実測。
- 12月14日 専門調査委員会。
- 12月22日～24日 根固め石実測(1/10)。
- 12月22日 町区長会見学。
- 12月26日～28日 主郭の全体写真撮影のため、昨年度調査区内に置いていた土の除去。
- 1月13日 三加和町コスモス学級生見学。
- 2月8日 主郭発掘完了写真撮影。
- 2月9日～19日 遺構実測。

なお、本調査の組織は下記の通りである。

調査主体 三加和町教育委員会

調査責任者 上原松柏(三加和町教育長)

調査事務 牛島茂生(社会教育課々長)

藤木住人(// 係長)

竹下康一(// 主事)

高木洋一郎(// //)

調査員 黒田裕司

専門調査員 原口長之(熊本県文化財保護審議員)

田辺哲夫(日本考古学協会員)

白木原和美(熊本大学文学部教授)

北野 隆(熊本大学工学部教授)

大田幸博(熊本県文化課文化財保護主事)

発掘作業員 福原艶子・福原房子・福原スミ子・福原 忍・国武ミチ子・鶴オワリ・鶴カヨ子

協力者 阿蘇品保夫(熊本県立美術館)・浦田信智(熊本県文化課)・坂田幸之助(玉東町史

編集委員)・中村幸史郎(山鹿市立博物館)・西澤八朗(熊本県文化課)・小山正子

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

三加和町は、熊本県の北部に位置し、東は鹿本郡鹿北町及び山鹿市、南は玉名郡菊水町、西は玉名郡南関町及び福岡県山門郡山川町、北は八女郡立花町に接しており、西より和仁川・十町川・岩村川と3本の川が南流している。

田中城は、三加和町和仁字古城に所在し、国土地理院発行2万5千分の1の地形図「関町」の北より3.6cm、東より10.1cmの地点に位置する。

地形的には、和仁川流域に発達した水田地帯を臨むように、舌状に延びた台地の根元を断ち切ることににより独立した丘陵を形成している。その中央部に平坦な一区画（長径50m、短径42m）を造り出して、これを主郭とし、その周囲に1～1.5mの段をもち、西を除く三方に幅10～50mの曲輪を設け、さらに、これより4～5m下った所に幅約15mの空堀を巡らし、西・南側では、自然地形を利用し空堀となし、城域を断ち切っている。空堀の対岸の南・北・西の三ヶ所には出丸的な高台も造り出している。

第2節 歴史的環境

町内を南流する和仁川・十町川・岩村川流域に多くの遺跡が点在している。現在まで約30ヶ所の遺跡が台帳に記載されているが、3分の1が古墳・横穴、3分の1が中世城跡、残りが原始及び近世の遺跡である。

旧石器時代の遺跡は未だ知られておらず、縄文時代になっても金敷原遺跡（第1図1）に縄文もあるとの記載があるだけで詳細は不明。昭和59年の田中城試掘で石鏃が出土している。

弥生時代になると遺跡数は増えてくる。田中城からも昨年度・今年度の調査で後期の住居跡が、それぞれ1基確認され、前述の金敷原遺跡にも後期の集落があったといわれる。また、松尾遺跡からは黒髪式単棺3基、城原遺跡からも要棺数基が出土した記録がある。このほか、特筆すべきは埴の前支石基群である。まだ未調査だが数基が確認されているという。

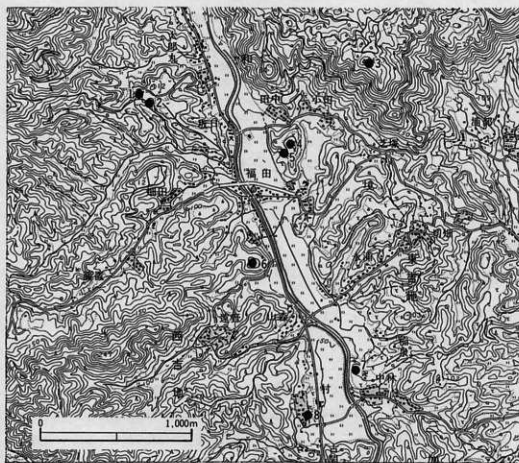
古墳時代になると、さらに遺跡数は増え、田中城横穴群（第1図5）、中林横穴群（第1図7）などの横穴群のほか、墳丘をもつものも数基みられる。

歴史時代に入ると、田中城のほか1587年の国衆一揆で落城した岡原城、神尾城などの中世城が主となり、六地蔵も数基みられる。

周辺遺跡について簡単に述べてきたが、遺跡があるという確認のみで、調査などはほとんど実施されておらず、遺跡の詳細については不明といわざるをえないのが現状である。

参考文献

- ・みかわ 町勢要覧'87 三加和町 1987年
- ・三加和町の文化財ガイドブック 三加和町教育委員会 1984年
- ・「熊本県の中世城跡」 熊本県教育委員会 1978年
- ・全国遺跡地図 43 熊本県 (財) 国土地理協会 1981年
- ・「熊本県埋蔵文化財包蔵地一覧表」 熊本県教育委員会 1977年



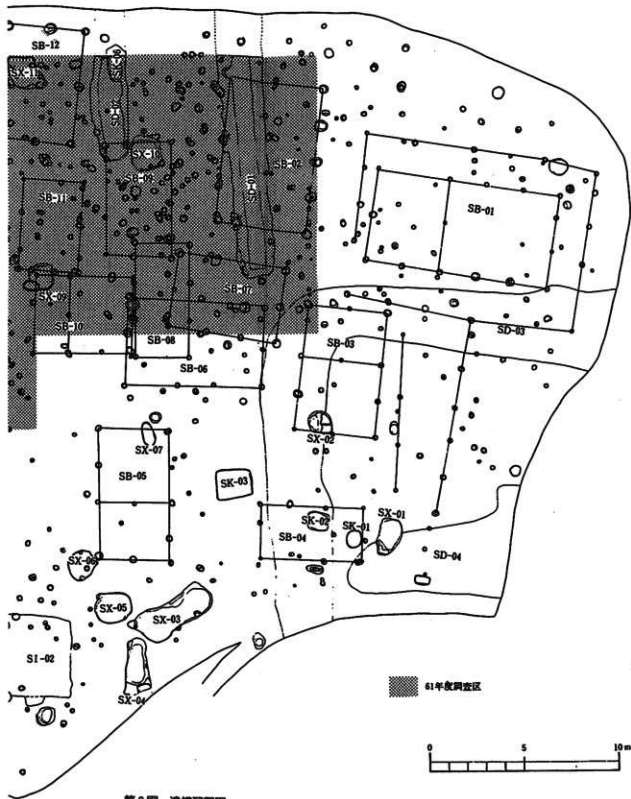
第1図 周辺遺跡分布図

番号	遺 跡 名	所 在 地	備 考
1	金 数 原 遺 跡	玉名郡三加和町和仁金数原	散布地
2	金 数 原 石 棺	玉名郡三加和町和仁金数原	箱式石棺
3	城 の 平 城 跡	玉名郡三加和町上板桶浦部	城跡
4	田 中 城 跡	玉名郡三加和町和仁古城	城跡
5	田中城下横穴群	玉名郡三加和町和仁古城	横穴
6	今 古 関 城 跡	玉名郡三加和町西吉地竹本	城跡
7	中 林 横 穴 群	玉名郡三加和町中林辻	横穴
8	村 遺 跡	玉名郡三加和町西吉地	散布地

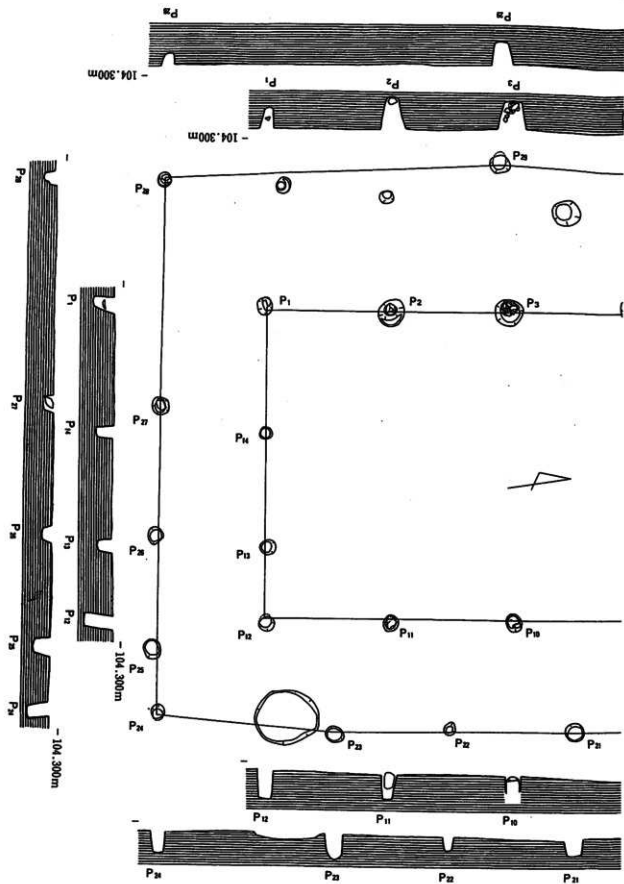
第1表 周辺遺跡一覧表



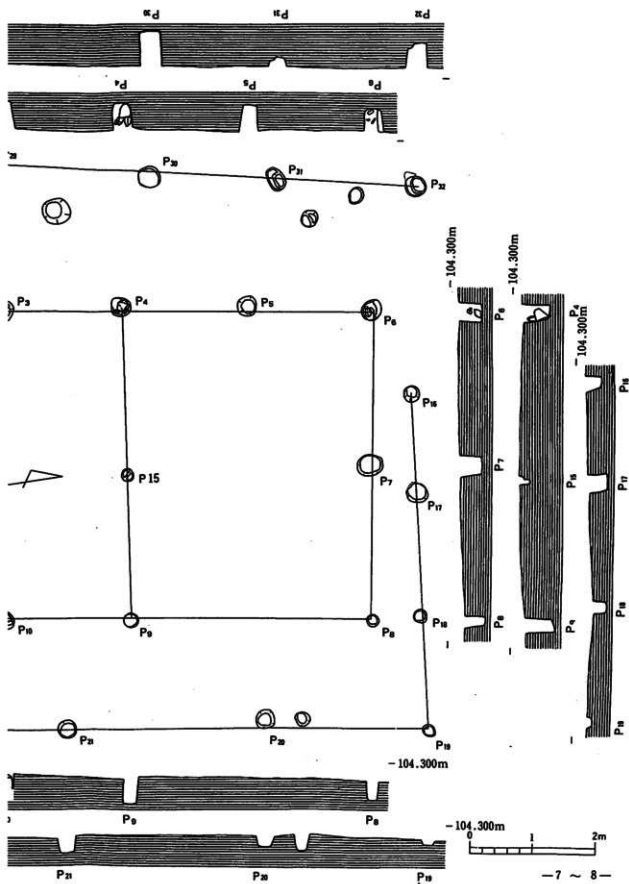
第2図 遺構配置図



第2図 遺構配置図



第3图 1号独立柱



第3图 1号掘立柱建物跡実測図

第三章 遺 構

第1節 掘立柱建物跡

本年度の調査で10棟(昨年度の調査区に延びるもの7棟)、昨年度の調査区内で検出された柱穴を検討して建てたもの4棟の計14棟の掘立柱建物跡を確認した。ただし、SB-14は弥生時代の竪穴住居跡と切り合っているため断定はできない。

基本的には、1間の長さはそれぞれ異なるが、2間×3間の建物が主となり、11棟を数える。平均的大きさは桁行6.36m(21.2尺)、梁行3.90m(13.1尺)で、棟方向は5棟がほぼ南北、9棟がほぼ東西方向を向く。

なお、倉庫跡と思われる総柱の建物跡はみられず、1段下の南側部分より、以前、焼米が出たということなので、その地区に倉庫群があった可能性がある。

・1号掘立柱建物跡(SB-01) (第3図)

主郭の最南部に建つ、桁行5間=9.74m(32.5尺)、北梁行2間・南梁行3間=4.84m(16.1尺)の建物で、北より2間目に間仕切りの柱がある。桁行方向はN8°Eを測り、柱筋は桁・梁行とも概ね揃えており、P₂・P₄からは根固め石が検出された。なお、P₂の根固め石には、石製深鉢(32)を転用したものもあった。また、この建物を取り囲むように柱穴が並んでおり、櫓列を思わせる。東桁行の北より2間目の柱を欠いている。

・3号掘立柱建物跡(SB-03) (第4図)

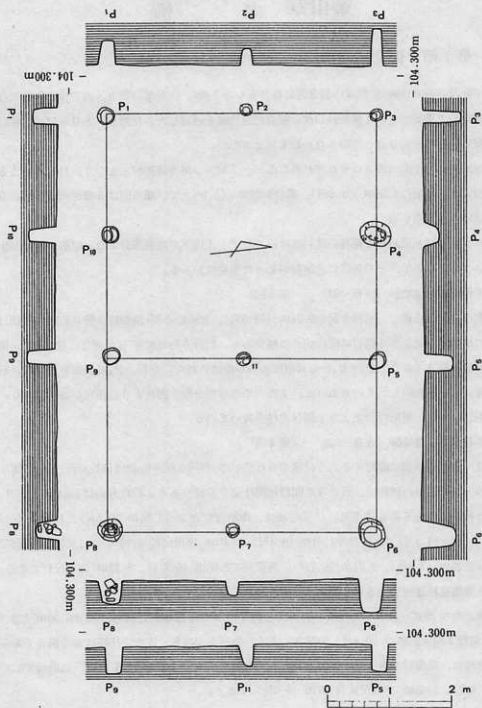
SB-01の西側に直行するように建てられている。桁行3間=6.69m(22.3尺)、梁行2間=4.30m(14.3尺)の建物で、西より2間目に間仕切りの柱がある。桁行方向はN84°Wを測り、柱筋は桁・梁行とも揃えてある。柱間寸法は、南桁行で西より1.94m(6.5尺)、1.94m(6.5尺)、2.81m(9.3尺)、北桁行で1.91m(6.4尺)、2.04m(6.8尺)、2.74m(9.1尺)、東梁行で北より2.29m(7.6尺)、2.01m(6.7尺)、西梁行で2.08m(6.9尺)、2.22m(7.4尺)である。

・8号掘立柱建物跡(SB-08) (第5図)

主郭の中央部に、SB-06・07・09・10と切り合って確認された桁行3間=6.06m(20.2尺)、梁行1間=2.95m(9.8尺)の建物である。桁行方向はE-Wで、柱筋はよく揃えてある。柱間寸法は、南桁行で西より2.04m(6.8尺)、2.38m(7.9尺)、1.55m(5.2尺)、北桁行で2.07m(6.9尺)、1.93m(6.4尺)、1.97m(6.6尺)である。

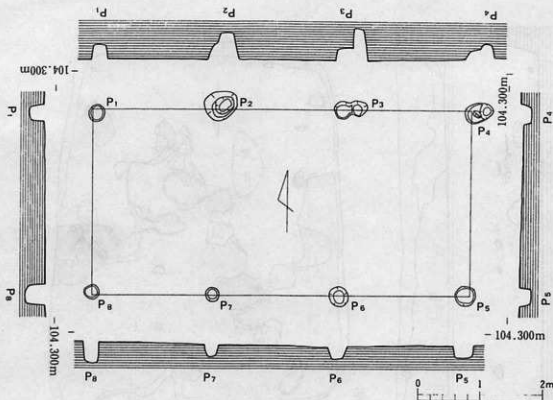
第2節 土 壊

6基の土壊を検出した。平面形はSK-Q1が楕円形、02~04・06が隅丸長方形、05が隅丸方形を呈しており、大きさは一定していない。01を除いて遺物が出土したが、いずれも15・16世



第4図 3号掘立柱建物跡実測図

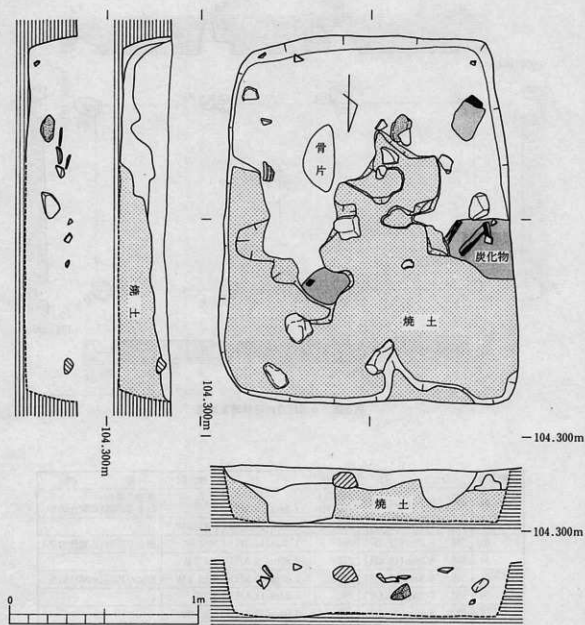
紀のものと考えられる。



第5図 8号掘立柱建物跡実測図

建物番号	桁	行	梁	行	棟方向	備 考
SB-01	5間	9.74m(32.5尺)	2間(北) 3間(南)	4.84m(16.1尺)	N8°E	周囲に棚列 北より2間目に間仕切り
02	4間	7.77m(25.9尺)	2間	5.13m(17.1尺)	N83.5°W	
03	3間	6.69m(22.3尺)	2間	4.30m(14.3尺)	N84°W	西より2間目に間仕切り
04	3間	5.59m(18.6尺)	2間	2.85m(9.5尺)	N1.5°E	
05	3間	6.97m(23.2尺)	2間	3.87m(12.9尺)	N89.5°W	西より1間目に間仕切り
06	3間	7.33m(24.4尺)	2間	4.44m(14.8尺)	N2°E	
07	3間	5.93m(19.8尺)	2間	3.94m(13.1尺)	N8.5°E	
08	3間	6.06m(20.2尺)	1間	2.95m(9.8尺)	E-W	
09	3間	5.97m(19.9尺)	2間	3.43m(11.4尺)	N89.5°W	
10	3間	5.21m(17.4尺)	2間	4.11m(13.7尺)	N1.5°E	北より1間目に間仕切り
11	3間	4.78m(15.9尺)	2間	3.22m(10.7尺)	N86°W	
12	3間	6.00m(20.0尺)	2間	3.92m(13.1尺)	N83.5°W	
13	3間	5.50m(18.3尺)	2間	3.51m(11.7尺)	N89°E	
14	3間	5.51m(18.4尺)	2間(西) 3間(東)	4.42m(14.7尺)	N86°W	

第2表 掘立柱建物跡一覧表



第6図 3号土壌実測図

・3号土壌 (SK-03) (第6図)

SB-04と05の間に位置する。長径1.93m、短径1.52m、深さ約0.25mの隅丸長方形プランで、長軸を南北方向にとる。南半分には焼土が厚く堆積しており、炭化物(木・竹など)も多量に検出され、長期間にわたってカマド様の用途で使用されていたものと考えられる。また、火舎・揺鉢片のほか、小動物のものと思われる骨片も検出された。

第3節 溝遺構

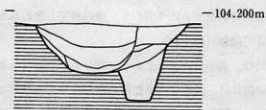
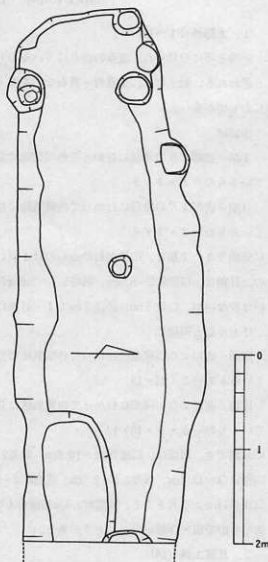
新たに2本の溝を検出した。SD-03は幅約2mで西から東方向へ約16m延びたあと、南へ方向を変え一段下の畑地まで切り通していると思われる。SK-02、SX-02と切り合っており、これらを発掘したところ肩部と思われる斜面が現れ、深さは約1.5mと推定された。また、SD-04は主郭の南西隅から北方向へ約8.5m延びる溝で、幅は約3.5mと広いが深さが約0.4mと他の溝に比べると浅く、性格を異にするものかもしれない。しかし、いずれも溝を埋めたあと柱穴が掘られていることから、時期的には田中城の最終時期よりも古いものと考えられるが、部分的に、わずかししか発掘していないため詳細については不明である。

・2号溝遺構 (SD-02) (第7図)

1号溝と平行して東西に走る溝で、長さ約7.9m、幅1.5~2.0m、深さ0.25~0.52mを測る。底面は西から東へ約27cmの比高差で傾斜している。断面でみると、柱穴→溝→土壌の順で形成されたと思われる。

第4節 竪穴住居跡

4.3×3.4mの長方形プランで、主軸をほぼ東西方向にとる。完掘はしなかったが、出土した甕の口縁部・脚部及び高坏などから、弥生時代後期の住居跡と思われる。このことから、昨年度調査区で確認された遺構(SI-01)も同時期の住居跡と考えられる。



第7図 2号溝遺構実測図

第IV章 出土遺物

1. 土師器 (1~13)

小皿と坏に分けられ、数点わかりにくいものもあるが、おそらく全て糸切り底で、ナデ調整と思われる。胎土には、金雲母・長石などを多く含み、焼成もあまり良くなくボロボロした感じのものが多く。

小皿は、

I類—底部より口縁部にむかって外傾気味に立ち上がり、底外面と体部との境がはっきりしているもの—1・4・5

II類—底部より口縁部にむかって内湾気味に立ち上がり、底外面と体部との境が丸味をおびているもの—2・3・6

に分類でき、I類は、口径がわかるものは1点しかないが、底径でみると3.4~4.2cmのもの、II類は、口径7.2~8.6cm、底径5.4~7.6cmのもので、器高はI・II類とも1.7cmである。資料は少ないが、口径6cm、底径5cmでI・II類に分類できそうである。

坏も小皿と同様に

III類—底部より口縁部にむかって外傾気味に立ち上がり、底外面と体部との境がはっきりしているもの—7・11・13

IV類—底部より口縁部にむかって内湾気味に立ち上がり、底外面と体部との境が丸味をおびているもの—8・9・10・12

に分類でき、III類は、口径10.2~10.8cm、器高2.9~3.35cm、底径6.6~7.6cmのもの、IV類は、口径11.4~12.4cm、器高2.5~2.6cm、底径6.0~9.0cmのものである。こちらも資料が少ないが、口径が11cmより大きくて、器高が2.5cm前後のものと、口径が11cmより小さくて、器高が3cm前後のものでIII・IV類が分かれそうである。

2. 瓦質土器 (14)

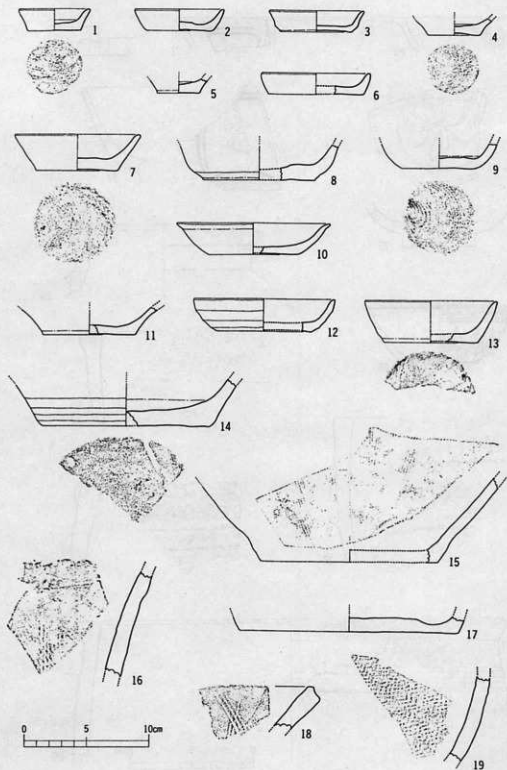
底径13.4cm、残存高3.3cm。金雲母を多量に含み、焼成は良好でよくしまっている。内・外面ともナデ調整で糸切り底か？ 甕の底部と思われる。

3. 擂鉢 (15~18)

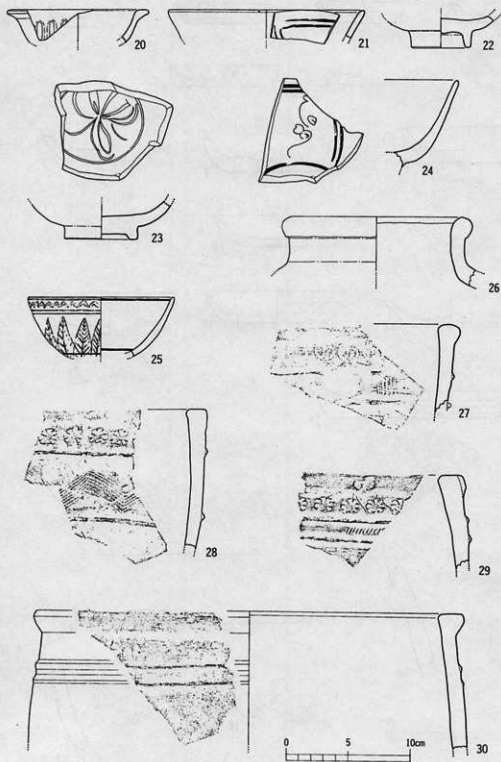
15は、底部から立ち上がった部分で、内面には8本単位の条線が深く刻まれている。焼成がよい割には、外面に指頭整形の痕が残って、歪んでいる。16~18は同一個体と思われる口縁・胴部・底部片である。底部内面に残っている条線は7本単位だが、他は小破片のうえ、よく使いつまれているため不鮮明である。いずれも須恵質である。

4. 須恵質土器 (19)

甕の体部と思われる。灰白色を呈し、内面はヘラ状工具による削り、外面は山形押型文を思



第8図 土師器・瓦質土器・播鉢・須恵質土器実測図



第9図 青磁・染付・備前焼・火舎実測図

わせる調整痕がみられる。

5. 青磁 (20~24)

20は口径11.4cm、残存高2.7cmを測る。全体に1~1.5mmと割合厚く釉がかかり、青白色を呈する。体部外面にはヘラ描きによる蓮弁文がある。21・24は同一個体と思われ、底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部では丸味をおびる。体部内面には、草花文と思われるヘラ描きがみられ、見込み部にも同様の文様があるものと推定される。22・23は高台である。22は、底径4.8cmで高さが1.2cmとやや高い。内・外面には薄く釉がかかり、緑青色を呈しているが疊付き部分は削りとなっている。胎土に不純物が混ざっており、ザラザラした感じがする。器面には貫入がみられる。23は、底径5.8cmで高さは0.4cmと低く、削り出しの高台である。釉は疊付きから部分的にはさらに高台内側にまでかかっており、やや黄味をおびた緑青色を呈している。見込み部には、草花文と思われるヘラ描きがみられる。いずれも中国製と思われる。

6. 染付 (25)

中国製の碗で、口径11.8cm、残存高4.8cmを測る。体部外面には、濃青色で木の葉と山形文と思われるものをぼかし気味に描いている。器面全体に貫入が入り、よく使い込まれている。

7. 備前焼 (26)

口径13.6cm、残存高4.3cmを測る。胎土は、径1~2mm程度の石英を含むが、焼成は良好で内面は赤褐色、外面は暗褐色を呈す。

8. 火舎 (27~30)

27~29は瓦質、30は土師質である。いずれも断面三角形の突帯を2条貼り付け、その間に27・29は縦方向の沈線を施し、28は8本単位の沈線で鋸歯文を描いている。また、口縁部と突帯の間には、27が巴文、28~30には花文が刻印されている。調整は、27が内・外面ともナデ、他は内面がハケ、外面がナデである。

9. 石製品 (31・32)

31は安山岩製の石臼で、復元口径約34cmを測る。32は凝灰岩を削り貫いた深鉢である。底部は平底で、やや内湾気味に立ち上がり、復元口径19.4cm、高さ11.9cmを測る。SB-01のP₃の根固め石に転用されていた。

10. 金属製品 (33・34)

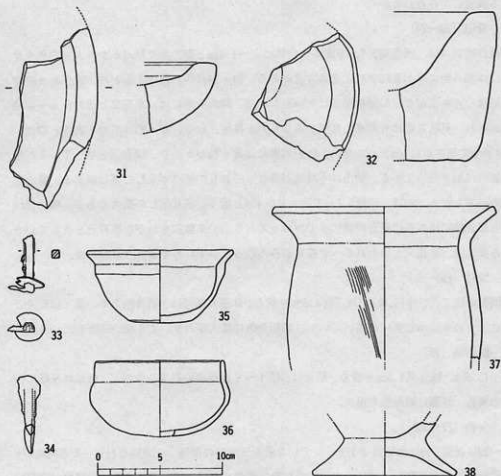
33は鉄製角釘を銅銭に通し、その先端をL字形に折り曲げている。銅銭の種類は不明。34も鉄製角釘と思われるが、サビがひどく頭部は不明。

11. 土鍾 (39~68)

今年度の調査で30点が出土。全て土師質で筒状をしており、形態の違いで2分類できる。

I類-径と長さの比が大きく、直線的なもの-39~54・56・61・62・66・68

II類-径と長さの比が小さく、胴部の中央に最大幅をもつもの-55・57~60・63~65・67



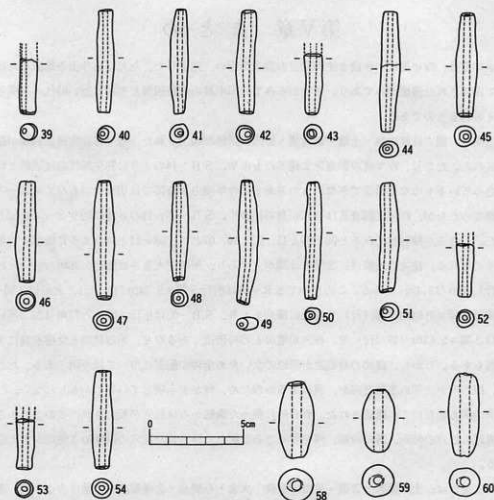
第10図 石製品・金属製品・弥生土器実測図

I類は径1cm前後、長さ5～6.5cm、孔径0.2～0.3cmで胎土は密、焼成は良好で赤褐色である。出土した21点のうち、完形品16点の平均重量は5.43g。特に、SB-02のP₉からは欠損品も含め16点がまとまって出土した。II類は径1.5～1.9cm、長さ3.3～4.8cm、孔径0.4～0.5cmで胎土はI類と変わらないが、焼成に差があり黒色～赤褐色を呈している。9点が出土し、平均重量は10.92gである。いずれも両端はヘラ切りしている。

I・II類では径及び重さの比が約1：2の関係にあり、用途などの違いが考えられる。

12. 弥生土器 (35～38)

35は口径11.6cm、器高5.8cmの小型壺、36は口径10.2cm、器高6.1cm、胴部最大径11.2cmの小型丸底壺、37は口径17.6cm、残存高12.3cm、胴部最大径15.6cmの甕、38は底径11.6cm、残存高4.3cmの甕の脚部である。いずれも長石・角閃石などを含み、全体的に器面が荒れているため、調整痕など判りにくい。



第11図 土錘実測図

番号	検出遺構	現存長 (cm)	直径 (cm)	孔深 (cm)	重量 (g)	備考	番号	検出遺構	現存長 (cm)	直径 (cm)	孔深 (cm)	重量 (g)	備考
39	SB-02P ₁	2.9	0.8	0.25	2.33	欠損	54	SB-02P ₁	5.2	1.1	0.3	5.67	
40	"	5.4	0.9	0.25	4.01		55	Pit-4	4.2	1.7	0.4	11.98	
41	"	5.5	1.0	0.25	5.14		56	Pit-15	5.1	1.0	0.3	5.83	
42	"	5.4	0.9	0.3	5.10		57	Pit-16	4.4	1.9	0.5	12.40	
43	"	3.2	1.0	0.3	3.17	欠損	58	Pit-31	4.1	1.8	0.5	12.56	
44	"	6.3	1.0	0.25	5.29	接合	59	"	3.3	1.7	0.5	9.68	
45	"	5.5	1.1	0.3	6.11		60	"	4.4	1.6	0.5	11.39	
46	"	3.3	1.0	0.3	5.96		61	Pit-33	5.2	1.0	0.3	4.82	
47	"	6.3	1.1	0.3	6.83		62	"	5.3	1.0	0.3	4.94	
48	"	3.1	0.9	0.2	4.57		63	Pit-43	4.0	1.9	0.4	10.81	
49	"	6.5	1.05	0.2	5.70		64	SX-03	4.8	1.5	0.5	9.89	
50	"	6.1	0.9	0.2	6.22		65	"	4.4	1.6	0.4	11.10	
51	"	5.8	1.0	0.3	5.66		66	"	5.4	0.8	0.3	5.02	
52	"	2.8	0.9	0.3	2.26	欠損	67	"	3.9	1.7	0.4	8.45	
53	"	2.7	0.9	0.3	2.64	欠損	68	"	3.6	1.0	0.3	1.76	欠損

第3表 土錘計測表

第V章 ま と め

本年度は、昨年度に引き続き主郭部分の調査を行い、完了した。ただし耕作土を除去した段階で確認された遺構のみであり、遺物からみて、田中城の最終段階とそれに近い時代の遺構と考えられるものである。

遺構は、掘立柱建物跡・土壇・溝遺構・竪穴住居跡が検出された。掘立柱建物跡は14棟が確認された。ただし、昨年度の調査区で建てたものや、SB-14のように弥生時代の住居跡と切り合っているものなど断定できないものもある。今年度の調査区では切り合いもなくスムーズに建てられたが、昨年度調査区は柱穴が異常に多く、SB-06～11の6棟は切り合って検出された。これらを検討してみると06と09と11、07と10、07と11、08と11というように最低4時期が考えられる。建物の規模は、2間×3間が主であり、平均的大きさは桁行6.36m (21.2尺)、梁行3.90m (13.1尺)である。このなかでSB-01は桁行5間=9.74m (32.5尺)、北梁行2間・南梁行3間=4.84m (16.1尺)で周囲に柵列をもち、SB-02は桁行4間=7.77m (25.9尺)、梁行2間=5.13m (17.1尺)で、柱穴が他のものの倍近くあるなど、他の建物と性格を異にする感もある。しかし、建物の時期差が明瞭でないため全体の配置については不明である。ただし、棟方向が主郭の主軸方向か、直行するかのため、何かを示唆しているのかもしれない。

溝遺構も新たに2本確認された。部分的に掘った溝底からは柱穴が検出され、このことから溝底の柱穴の時期、溝の時期、溝を埋めたあと新たに作られた柱穴の時期の3時期が考えられる。

出土遺物は、土師器類・青磁・染付・播鉢・火舎・石製品・金属製品など量は少ないが、多種にわたっている。ほとんどが15世紀後半～16世紀にかけてのものと思われ、検出遺構の時期決定をする上で重要なものである。

このほかに昨年度の報告書でも述べられているように弥生時代の遺構もみられた。4.3×3.4mの竪穴住居跡で、一部を掘っただけだが弥生時代後期の土器類が出土し、同時代の住居跡と思われる。このことから、昨年度の検出遺構も同時代の住居跡とみて間違いないだろう。しかし、いずれも床面まで数cm～15cm程度しかなく、かなり削られている模様で、田中城築城、あるいは改城の際に整地されたものと考えられる。

以上、今回の調査で確認されたことをまとめてみたが、まだ主郭の調査が終わったのみであるため、全体像については今後の調査をまたねばならない。また、紙面の都合で検出遺構を全て載せることができず、文章もかなり削ってしまい、わかりにくい部分も多くあると思われる。国庫補助事業としての調査は、まだ3年続くことでもあり、その間に順次まとめていくことにしたい。



(1)遠景（北東より）



(2)遠景（南西より）



(3)空堀



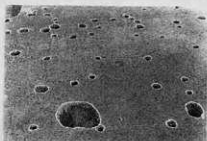
(1)主郭全景 (北より)



(2)S B-01 (西より)



(3)S B-02 (西より)



(4)S B-03 (西より)



(5)S B-05 (北より)



(6)S B-04・05 (南より)



(7)S B-12・13 (北西より)



(8)S B-06~11 (北西より)



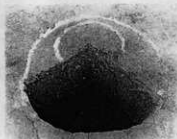
(1) S K - 03



(2) S K - 01



(3)柱穴検出状態



(4)柱痕跡検出状態



(5)根固め石検出状態



(6)火舎出土状態



(7)播鉢出土状態



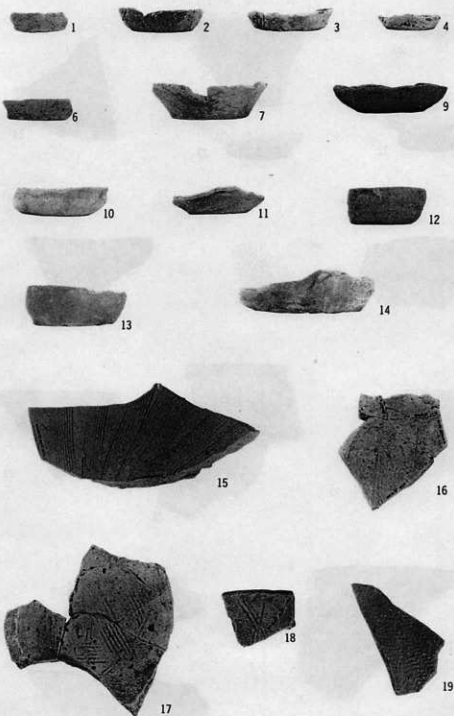
(8)土鍾出土状態



(9)土鍾出土状態



遺物出土状態



出土遺物（土師器・瓦質土器・擂鉢・須恵質土器）



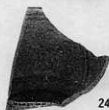
20



22



23



24



25



26



27



28



29

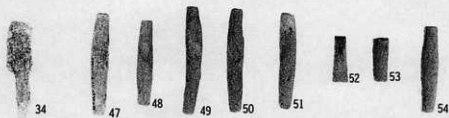
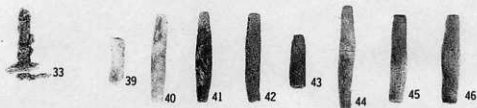


30



31

出土遺物（青磁・染付・火舎・石臼）



出土遺物（金屬製品・土鐘・弥生土器）

三加和町文化財調査報告 第2集

田 中 城 跡 II

— 主郭調査の概要 —

1988年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会

〒861-09 熊本県五名郡三加和町飯橋90

印 刷 下 田 印 刷

〒869-05 熊本県下益城郡松橋町久良